3/15
赤旗

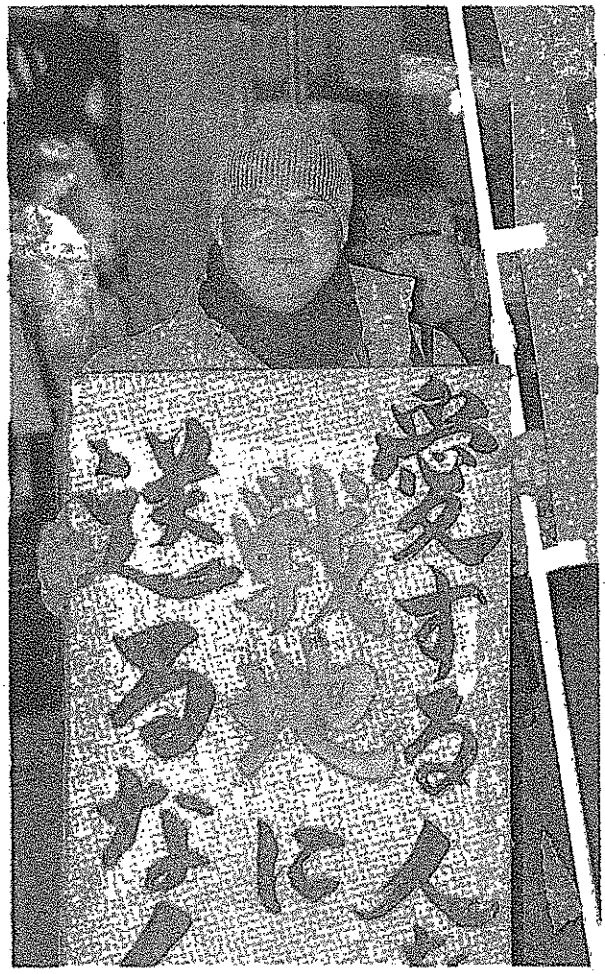
戦争法反対 自衛官の父親 毎週行動

「愛する人を戦地に送るな」―。29日の戦争法（安保法制）施行を前に、毎週、このプラカードを掲げ、街頭で訴える男性がいます。富山正樹さん（52）＝福岡市在住＝。現役の自衛官の息子をもつ父親です。

（山田英明）

福岡でスタンディング

富山 正樹さん（52）



「愛する人を戦地に送るな」と訴える富山正樹さん＝10日、福岡市中央区天神

富山さんは、毎週木・日曜日には福岡市天神、毎金曜日には北九州市の小倉駅前で戦争法廃止を訴えています。

10日夜、商業施設・天神コア前。冷え込みの中、十数人の仲間とともに「民主主義と人権を奪い、戦争の道に踏み込むことは絶対に許せません」と訴える富山さんの姿がありました。

「息子を戦地に送るな」

1人立ちあがる

息子は、自ら志願して自衛官になりました。

昨年7月15日、衆院で安倍政権と自民、公明両党が戦争法を強行採決した瞬間、富山さんは「このまま何もしなかったら日本は大変なことになる。自分が何もしないで、息子が戦場に行くことになったら、自分で自分を許せない」との強い思いに襲われました。

じっとしていられず、3日後の18日には1人で小倉駅前に立ちました。「アピールしないといけないのですが、とてもとても。通行人から隠れて立っていました」。「ほかにもやり方があるじゃない」、妻にもそう強く反対されました。

それでも、ツイッターでその日のスタンディングの様子と翌日の案内を発信しました。「驚きました。翌日、コア前に立つと、見知らぬ女性が1人、次の日には男性3人が来てくださいました」

「みなさん、『自分も何かしたい』と思っていました」。たった1人で始めたスタンディングは、9月19日の戦争法成立時には仲間が60人近くに。10日のスタンディングでは、十数人が富山さんとともに街頭に立ちました。今では妻も一緒に立つ大切な仲間です。

（3面につづく）

3/15 赤旗

「反アベ」いま必死にならないと

1面のつづき

野党共闘を応援

福岡・自衛官の父 富山正樹さん

昨年末、米国に住むある日本人女性からインターネットの交流サイト・フェイスブックを通して富山さんにメッセージが送られてきました。そこには「自分が抱えている後悔を絶対に富山さんにさせたくない」とありました。

米兵の母の思い

彼女は、イラクに派兵され帰還した米海兵隊員の息子をもつ日本人女性・長島志津子さん。「息子の笑顔　戦争が奪った―イラクの前線部隊にいた日本人」（「しんぶん赤旗」日曜版2015年11月15日号）の記事に描かれた女性でした。

「志津子さんは息子を戦場に送ってしまったわけです。当時、眠るのが怖いほどの思いを抱えていた彼女。今も息子さんは、普通の生活に戻れていない。その事実を知りえた自分の責任として、このことを伝えきらないといけない」。今では、志津子さんとは、海を越えて互いを励ましあう仲間になりました。

訴える日本共産党のしばた雅子候補を見守る富山正樹さん＝10日、福岡市中央区天神

同じ思いを抱くほかの自衛官の家族にも一緒に立ってほしいという思いもあります。しかし、「親の行動が自衛隊内で問題視され、もし息子が戦場で捨て駒にされるようなことになれば…。そう思うと…」。富山さんに苦悩が浮かびました。

「でもね、息子は『父さんは父さんの人生、思いがあって生きているのだから、それをまっとうすればいい。自分は自分の生きる道がある』と言ってくれる。彼には自衛官として自分の正義に誠心誠意尽くしているという思いがあります。こっちは、早くやめればいいのにと思いますけどね」

最近の訴えで力を込めているのは、安倍政権が打ち出した改憲と「緊急事態条項」制定のたくらみです。

命がかかってる

人権と民主主義の抑圧につながる「緊急事態条項」。戦前の日本やナチス・ドイツでは、反戦や民主主義を訴える人々が弾圧されました。「参院選で負ければ、今度のクリスマスには、この場所で仲間たちとスタンディングができるかどうか分からない。ここに来る仲間は、そういう覚悟の上で、ここに来ています」

だから、安倍政権打倒をめざす野党共闘の動きに対し、「期待どころの話ではないです。やってくれないと、私たちの命がかかっています」。スタンディングには、富山さんの思いに共感する全野党、候補者ののぼりを掲げています。「政党がどうのと言っていられない。負けるわけにはいかないのです。必死になって『反アベ』のすべての政党を応援しないといけない」の思いからです。

10日のスタンディングには、日本共産党のしばた雅子候補（参院福岡選挙区）が参加しました。

「今日ここに、私たちが票を投じるべき野党の候補、日本共産党のしばた雅子さんが来てくださっています」。富山さんはこう語り、しばた候補にマイクを渡しました。